１、科目区分　　教職科目 B
　　授業科目名　音楽科教育法Ⅱ

授業づくりの考え方と方法を学ぶために

音楽教育講座　石塚真子

Ⅰ、音楽科教育法Ⅱ

１、授業の概要

「音楽科教育法Ⅱ」は、2 年生を対象に後学期開講、受講者は 11 名である。

この授業の目的は、「音楽教育の歩み、目的、内容、学習材、学びのあり方等についての基礎的な知識を得ることによって学校教育における音楽科教育の位置づけや意義について理解する。さらに、音楽の授業を展開するための基礎的な能力を身につける」である。

到達目標は、「(1)音楽教育の歩み、目的、学習材、学びのあり方等についての基礎的な知識について説明できる。(2)音楽科の授業づくりにおける学習材研究を行うことができる。(3)音楽の授業づくりを行うことができる。」であり、関連する DP は、「教育に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を習得している。」および「自己の学習過程を明確にし、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。」である。

授業内容は、前半に音楽教育に関する講義、後半は、授業づくり（模擬授業）を行った。

教材研究を深めることと、そこから得た知識を模擬授業のなかで、簡潔かつ適切に他者に伝える方法について考えること、この 2 点について特に意識してとり組んだ。

２、授業内容について

1 回～4 回までは、授業づくりにおける基本的な考え方について講義を行った。さらに、限られた授業時間のなかで、伝達すべきことを簡潔かつ適切に説明できる力を身につけるために、15 秒、30 秒、45 秒、60 秒 presentation を行った。毎回、与えられたテーマに基づき、その場で提示された時間の中で、自分の考えを述べるという活動を行った。

5 回～7 回は、例えば「アルトリコーダーの導入について」等、こちらで指定した 5 つのテーマに関する授業づくりをグループごとに行った。さらに、授業づくりのプロセスで得た知識や方法が実践で生かされるように、各グループで指導案と教材研究資料を作成し、研究討議を行った。

8 回～15 回は、「歌唱」、「鑑賞」、「創作」、「器楽」、「日本伝統音楽」、「諸民族の音楽」をテーマに、一人ずつ授業づくりを行った。授業づくり後には研究討議を行い、そこから学んだことを、フィードバックシートに記入し、各自で確認するようにした。また、授業づくりについては、授業外の時間に個別指導を行い、教材研究の指導に力を入れた。

３、学生の授業評価

学生自身が、この授業について、どのようにとり組んだのか質問紙調査を行った。(回答者数　11 名)

(1)「授業づくり」へのとり組みについて

授業づくりの事前学習については、10 時間～15 時間かけて行った学生が多かった。全員に個別指導を行い、課題を確認したことによって、学習材や学習方法に関する研究が深められたのではないかと考える。

(2)「 授業づくり」後のとり組みについて

時　間	自分の授業づくり後（人数）	他者の授業づくり後（人数）
0.5 時間未満	2 名	1 名
0.5 時間	4 名	5 名
1 時間	2 名	3 名
1.5 時間	1 名	1 名
2 時間以上	2 名	1 名

授業づくりの事前学習は熱心であるが、事後学習、特に他者の授業に関する学習不足は、昨年度からの課題であった。そのため、フィードバックシートの設問を教材研究に焦点化し、授業時間外の指定された日時に提出することにして、事後学習に意識が向くように工夫した。

事後学習については、学生から「他のグループの指導案やワークシートを見直すことで、自分のものとの違いを発見でき、自分の指導案の改善点が見つかることがよくありました。他のグループのよいところを取り入れたり、進め方を参考にす

ることができました。」との感想も得られたが、多くの学生は、「授業づくりに専念しすぎ、授業後は達成感でいっぱいになってしまったため、あまり復習をする時間をとることが出来なかった。」のように回答している。授業づくり後の学習を深められるような方法について検討したい。

４、今後の課題

この授業は、「教材研究」と、授業づくり（模擬授業）における「伝える力」の２点に力を入れてとり組んだ。

学生からは、「音楽の授業は自分の経験に基づくところが非常に多いと思っていたが、それは授業の中身から考えるからで、指導案から考えたら、そうではなく、自分で作り上げてオリジナルの授業ができるのだと感じた。そのためには深い教材研究と、教材を選ぶまでのその分野の研究も必要だと感じた。」等の感想が数多く得られ、教材研究を深めるという目標は達成できたように考える。しかしながら、「教材研究はしたが、選択をすること（整理）ができていなくて、授業づくりに生かすことができていなかったと思う。」という感想もあるので、次年度は、個別指導の時に、この点を踏まえて指導を行いたい。

「伝える力」については、15 秒、30 秒、45 秒、60 秒 presentation が、授業づくりで役立ったとの感想が数多く得られたが、実際の授業づくりの中での指示、説明等においては、正確な情報をわかりやすく伝えようとする意識が不足していたといえる。これは、教材研究に力を入れたため、指導案作成がゴールになってしまったのではないかと考える。

次年度は、個人指導を指導案作成まででなく、授業のシュミレーションも含めて行いたい。

Ⅱ、日本音楽教材研究②

１、授業の概要

「日本音楽教材研究②」は、後学期開講、受講者は７名である。

授業の目的は、「日本の伝統音楽では何が大切にされているのか基礎的な知識を得ることと、学習材としてとり上げる際の考え方と方法について理解する。特に太鼓に焦点を当てて考える。」である。

この授業は、防音設備の関係で６時限目に開講している。そのため、時間割上は集中講義となっているので、今年度は授業の曜日・時間の発表後に、３割の学生が、履修登録を取り消した。

２、授業について

６時限目に授業を行うことについて、学生に質問紙調査を行ったところ、よかった点については、「他の授業と重ならなくてよかった。」「最後の時間帯なので、落ち着いて準備・片付けができ、授業にも集中出来た。」という回答が大半であった。不都合が生じた点については、「1~6 時限目まで授業が入っていたので、少し大変だった。」「サークル等の練習と重なってしまった。」「専修・コースの演奏会に向けての練習に支障が出た。」等の回答があった。授業時間帯外での授業であるので、学生一人ひとりの事情も把握しながら授業を進めていった。

つぎに、授業内容についてであるが、太鼓を叩いたことのない学生が半数いたため、まずは、太鼓の音楽的特徴を体験的に学ぶことから始めた。教材は、小・中学校でとり組みやすい創作太鼓から１演目、地域の祭りで伝承されている芸能から１演目選択し、創作太鼓と祭囃子との共通点、相違点等、現場で太鼓をとり組む際の教材研究のポイントが明確になるようにした。

また、学習方法については、学校の授業においても口頭伝承でとり組むためにはどのような点に留意したらよいのか、活動を通してポイントを提示していった。「口頭伝承なのに、15 回でみんな、身に付いてできていたので、1 週間で覚えられるくらいの量の積み重ねがいつの間にか形になるのだな･･･と改めて驚きました。」との感想が得られ、授業構成からも、太鼓の学習方法について理解できたと考えている。

さらに、太鼓の実技については、授業の復習や予習を行う場所がないため、太鼓が無い場合でも学習できる方法をとり上げ、自己学習へつなげた。「家でまくらをたたいて練習した。」「唱歌を口ずさんだ。」など、それぞれに工夫して自己学習を行ったようである。

３、今後の課題

５年の間、太鼓の実技関係については、このような条件でとり組んできたが、授業時間帯、授業外学習の保障ができないこと等、課題を改善することができなかった。

次年度は、講義主体とした授業にシフトし、今後の太鼓の実技関係の授業のあり方について検討したい。